

「古今和歌集」の和歌と歌人

アン・コモンズ

「日本の古典文学を語るとき、和歌を除いて語ることはできないし、和歌文学を語るとき、『古今集』を除いて語ることはできない。」

上記の引用文は、「古今集」が日本古典文学界に極度に重要な位置を占めることを示している。

「古今集」の十世紀の編集から、その入集された和歌は、以降の和歌の歌風に比類のないほど大きな影響を及ぼしてきた。

「古今集」は醍醐天皇の勅命で編集され、延喜五年（九〇五年）₂に成立したと言われている。

天皇の勅命に従って、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人が撰者として選ばれた。

「古今集」の成立期には、漢詩に対して、和歌の復活が見られる。

「古今集」の特徴の一つに紀貫之の「仮名序」が挙げられ、それは日本最初の文学評論文であり、最古の純和風の散文だと言われている₃。

また、「古今集」以降、短歌は和歌の一流形態として確立された。

「古今集」は、紀貫之の「仮名序」で始まる。そこには「和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける・・・力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり。」₄と書かれている。

このことから、和歌が大切に、精神的な力のあるものとして見られていたことがうかがえる。

「平安貴族にとって、和歌は極めて重要な必修科目₅」で、他の文学形式より尊ばれるものだったようである。

和歌は、よく、恋人への贈答用に詠まれたり、ある行事を記念するために詠まれる場合もあった。

「古今集」に収録されている約千百余首の和歌では、五・七・五・七・七の三十一音から成るものが圧倒的に多い。

別の歌体を使うことが、「万葉集」と比較すると少なくなった。長歌が五首、施頭歌が四首しかないのだ。

(2)

「古今集」においては、和歌は図の通りに、主題によって二十巻に分けられている。

| | | | | | | |
|-------------|------------|-------------|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 卷一 春(上) | 卷二 春(下) | 卷三 夏 | 卷四 秋(上) | 卷五 秋(下) | 卷六 冬 | 卷七 賀 |
| 卷八 離別 | 卷九 羈旅 | 卷十 物名 | 卷十一 恋(一) | 卷十二 恋(二) | 卷十三 恋(三) | 卷十四 恋(四) |
| 卷十五 恋(五) | 卷十六 哀傷 | 卷十七 雑(上) | 卷十八 雑(下) | 卷十九 雑体 | 卷二十 大歌所御歌 | |

6

各巻の中に歌が精密的に組織され、例えば、春の巻(巻一・巻二)を見ると、歌が「立春」や「春の雪」の歌から「惜春」や「春の果て」の歌までの順序で自然に配列されている。

この配列の仕方は、季節の巻と恋の巻には、特に目立つものだといえる。

また、歌風について、「古今集」を「万葉集」と比較すると、ある違いが目立つ。

「万葉集」の歌風を、江戸時代の国学者・賀茂真淵は、「益荒男振り^{ますらうせふ}」、^{てぢやめぶ}「古今集」のそれを「手弱女振り」と呼んだ。

「万葉集」の「益荒男振り」は、「調子が重々しく、力強い男性的な歌風」だそうだ。

「万葉集」の約四五〇〇の歌には、重要な特徴が色々ある。

まず、「万葉集」に収録されている歌の作者は、様々な社会階級の人々だった。

例えば、「万葉集」の一号の歌は雄略天皇の作とされており、一方、四三二三号の歌は防人の歌なのだ。

又、「万葉集」の歌は、色々なものを主題とし、多種多様な、貧困・死・自然・恋愛などが率直に詠まれた。

この率直さは「まこと」として知られているようで、山上憶良の歌、例えば「貧窮問答の歌」(八九二号)や山部赤人の自然についての歌(九二四・九二五号)に、この「まこと」はみうけられる。

「歌の聖」・柿本人麻呂の歌にもこの率直さの特性が現われている。例えば、「妻の死^{つまがねし}りし後、泣血愛^{なみけ}働みて作れる歌」(二〇七号)。

一方、「古今集」の「手弱女振り」というのは、「やさしくなよなよとした女性風の意^いで、優美・繊細な歌風」として評されているようだ。

「万葉集」に対して、「古今集」の作者・主題の範囲は狭くなったのだ。

概して、「古今集」の歌人は宮中に関する人だそうで、主題は恋愛(例えば六二五号

「有明のつれなくみえし別れより 曉ばかりうきものはなし」(壬生忠岑)・歳月の経つこと(例えば一一三号「花の色はうつりにけりな いたづらに 我が身世にふるながめせしまに」小野小町)・夢と現の関係(例えば八三五号「寝るがうちに見るをのみやは夢といはん はかなき世をもうつつとはみず」壬生忠岑)のようなものとなる傾向があったようだ。

この主題については、「万葉集」の率直性に対して、「古今集」の作者達は、間接的な表現を好んで用いる傾向があった。

「仮名序」から、和歌の理想は「こころ」と「ことば」の釣り合いだったことがうかがえる。

「こころ」は率直な感情だったそうだし、「ことば」というのは言語的な技法で、「古今集」の歌には様々な技法が、次の通りに使用されているようだ。

「見立て」という技法は、「間接的に他のものに擬えてする表現方法」だと言われ、例えば、「冬枯の野辺と我が身を思ひせば 燃えても冬を待たましものを」(七九一号)の歌に現われて、作者の身体が「冬枯の野辺」に例えられているのだ。

この「見立て」の特別な種類が「擬人法」で、「何かを人間に擬える」という技巧だそう。だ。「老いらくの来むと知りせば門さして無しと答へてあはざらましを」(八九五号)で「老いらく」が人間に擬えられ、擬人化の例なのだ。

「万葉集」に現われる技巧も「古今集」の歌に用いられていて、そのうちの一つが「枕詞」と言う。

「枕詞」は「一定の語の上にかかって、ある種の情緒的な色彩を添えたり、句調を整えたりするのに用いられるが、主想とは直接に意味的な関連のない語である」と考えられている。

「古今集」では、「枕詞」が用いられる場合が多く、例えば、「いとせめて恋しき時は射干玉の夜の衣を返してぞきる」(五五四号)の「真っ黒」という意味の「射干玉の」、また「夕月夜をぐら山に鳴く鹿の声のうちにや秋はくるらむ」(三一二号)の「薄暗い」という意味の「夕月夜」。

「枕詞」は普通五音で構成されている。

一方、「序詞」というのは、「枕詞と職能は同じであるが・・・普通五音以上である」と言われている。「ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」(四六九号)の「ほととぎす鳴くや五月のあやめ草」や、「わがせこが衣春雨降るごとに野辺のみどりぞ色まさりける」(二五号)の「わがせこが衣」がこの技法の例なのだそう。

また、平安時代の初期に現われたような技巧もあり、「同音異義を利用し、上下に掛けて、一語に両様の意味を持たせる修辭法」である「掛詞」がその一つである。

前出の「花の色はうつりにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに」(一一三号)の「ふる」(占る・降る・経る)、「ながめ」(長雨・眺め)や、「立ち別れいな

ばの山の峯に生ふるまつとし聞かば今帰り来む」（三六五号）中の「いなば」（住なば・因幡）、「まつ」（待つ・松）は「掛詞」の例である。

「縁語」というのは、「歌中の語句に縁のある語を意識的に詠み込んで、両者を照応させる修辞法である」と言われる。

例として「袖ひぢてむすびし水の凍れるを春立つけふの風や解くらむ」（二号）では、「『袖』の縁によって『結ぶ』『立つ（裁つ）』『解く（解氷）』と衣に関係ある語を並べた」という場合があるそうだ。

この和歌の技巧は、語に余分の意味・感情を添え、言語を豊かにするのだ。

「古今調」という間接的、優美な歌風は、主題と調和していると言える。

「古今集」に収録されている最古の歌は「よみ人知らず」の歌とされているが、詠んだ人が不明で、詠まれた年代は正確には決められないわけだ。

しかし、「概して、『よみ人知らず』の歌の中に、民謡風の歌や「万葉調」に近い古風な歌が多いので、おそらく『万葉集』に続く時代の歌ではないのだろうか」とは言われている。

確かに、万葉時代の「歌の聖」・柿本人麻呂の歌が「古今集」に入っているようだ。しかし、それが本当に人麻呂の作なのかは疑問である。

その後は「六歌仙時代」だったそうだ。

「仮名序」で、紀貫之はある六人の歌人に対して批評した。その六人の歌人達、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主には「六歌仙」という名が付けられた。

「なぜこの六人が批評の対象になったかについてはあきらかではない。」とされているが、その歌人の活躍期（八五〇～九〇〇年位）には、新しい歌風が現われたようなので、「この六歌仙を中心に一つの時代が形成されていると考えるのは妥当」である。

それで、「六歌仙時代」は、「古今調の確立期」として見ることができる。

「六歌仙」について

僧正遍昭

弘仁七年（八一六）～寛平二年（八九〇）

俗名は良岑宗貞、桓武天皇の孫、素性法師の父。仁明天皇に仕えて、蔵人頭まで昇進したが、八五〇年の天皇の崩御で、比叡山の修道院にはいった。貞観時代に、花山の元慶寺の座主となり、八八五年には僧正になった。

「仮名序」で紀貫之は、「僧正遍昭は、歌のさまは得たれども誠すくなし。たとえば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし」と書いた。

僧正遍昭の歌には、言葉遣いの巧みさとともに機知に富む言葉が多いと言われ、例えば、一六五号の「蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」の歌は、

「どうして蓮の葉は露が玉と偽っているのか」という質問の様子があるそうだ。
僧正遍昭の歌は「古今集」中に十七首入選している。

在原業平

天長二年（八二五）～元慶四年（八八〇）

平城天皇の孫だったが、臣籍に降って、在原という姓を賜った。

右近衛権中將に任命されたが、それ以外の詳細はあまり分かっていない。

しかし、業平の情事に関する伝説は数多く、「伊勢物語」に収録されている。

「仮名序」では、業平の「しぼめる花の色なくてにほひ残れるがごとし」とかかれていて、強い情感が含まれているが主題が不完全に発表されていると批評²⁶されている。

業平の有名な歌、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ 我が身ひとつはもとの身にして」について、「古典的な美しい言葉の緊密な接続によって、優美で浪漫的な気分をかもしだした王朝名歌といえる」²⁷そうだ。

「古今集」中に彼の歌が三〇首載せられている。

小野小町

生没年未詳。しかし、「『古今集』に安部清行・小野貞樹・文屋康秀との贈答歌があることによって、小町の歌人としての活躍時期を九世紀中頃とすることができる。」²⁶

詳伝はないが、伝説は大変多い。この伝説によれば、小町は比類なくうつくしかつが、愛人に対する応対は残酷だったようであるが、確実に才能のある歌人だった。

紀貫之は「仮名序」で小町の歌を「あはれなるようにて、強からず。言はば、よき女の悩めるところあるに似たり」と評している。

「古今集」には、小町の歌が十八首あり、恋や夢・現を主題にしたものが多い。

彼女の歌の特色は、歌の表のやさしい優美さとそれに対する裏の情熱、色々な技法の巧みな用いられ方なのだそうだ。

彼女の最も有名な歌は多分「百人一首」にも選ばれている「古今集」の一一三号、「花の色はうつりにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに」だろう。桜の花を作者の美貌に擬え、歳月が経つことへの感慨が繊細な言葉で表現されているので代表的な歌なのだと言える。

文屋康秀

生没年未詳。

三河掾になった頃、小野小町を三河へさそったらしく、小町の贈答歌が「古今集」の九三八号の歌となる。

「仮名序」で、「文屋康秀は、言葉はたくみにて、そのさま身におはず。言はば、

商人のよき衣きたらんがごとし²⁸』と評されている。

機知と言葉の巧は、「吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしというらむ」（二四九号）の歌に見られるそうだ。「山」・「風」という漢字が当字のように組み合わせられて、掛詞の「あらし」・「嵐」になるのだ。

康秀の歌は「古今集」に五首載せられている。「作歌技巧のすぐれた歌人²⁹」だと言われている。

喜撰法師

生没年未詳。

「伝記については一切わからない³⁰」けれども、歌によると宇治山に多分陰者として住んでいたようである。

紀貫之は「仮名序」で、「宇治山の喜撰法師は、言葉かすかにして、初め終わりたしかならず。言はば、秋の月を見るに曉の雲にあへるがごとし³¹』と評し、それから「よめる歌多く聞こえねば、かれこれを通はしてよく知らず³²』と述べている。

実は、「古今集」に喜撰の歌は一首しかなく、それは九八三号の「我が庵は都の辰巳鹿ぞすむ 世を宇治山と人はいふなり」である。この歌には「宇治」と「憂き」という言葉が例えられているそうだ。

喜撰の歌は、これ以外に二首しか知られていない。

大伴黒主

生没年は未詳だが、おそらく九世紀の後期に活躍したようだ。陰陽師で神祇官に仕えたそうだ。

「仮名序」で、紀貫之は黒主の歌の様子を卑俗だと考え、「言はば、薪負へる山人の、花のかけに休めるがごとし³³』と述べている。

黒主は「古今集」に歌が三首載せられており、その一首が七三五号の「思ひいでて恋しき時は初雁のなきてわたると人知るらめや」である。

黒主の歌は「古風で素朴な詠み振りである」とされている。

「六歌仙時代」の次は「撰者時代」呼ばれる時期だ。

この「古今集」が編集されている頃は、「古今調の完成期」として見られる。

「『古今集』の歌の特色を言う時、この時期の歌風でそれを代表する³⁵』そうだ。

「古今集」に収録されている歌の中では、この頃の歌が最も多い。

また、「歌人別に見ると、撰者の歌が圧倒的に多く・・・撰者四人の収載歌総数が二四三首、『古今集』全体の五分の一強を占めていることになる³⁶』と言われる。

撰者の四人で、最も有名なのが紀貫之（八六八～九四五）である。官位は低かったが、歌論家・文章家として尊敬されていたそうだ。

「仮名序」は名作だと言われ、貫之は土佐守の経験から「土佐日記」という旅日記を作ったし、「古今集」の中に歌が二〇二首載せられている。

彼の歌のは主知的な調子のある傾向があると言えるし、修辭などのような技巧が上手く用いられている。

彼の歌は、その「撰者時代」の代表的なものだと言える。

「古今集」の他の撰者達、紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑らも、素性法師・伊勢・清原深養父らも、「撰者時代」の重要な歌人で、深養父以外は、皆が三十六歌仙に含まれている。

「古今集和歌集」は「和歌史上、最も影響力のある撰集」と評されたことがあり、以降の勅撰集は、「和歌も、形態も、組織も、基本的にはすべて『古今集』の延長線上にあった。」

紀貫之が「仮名序」の中で「かく、この度集めえらばれて、山下水の絶えず、浜の真砂の数多く積りぬれば、今は、飛鳥川の瀬になる恨みもきこえず、さざれ石の巖となる喜びのみぞあるべき」と書いたように、「古今集」は日本文学史上、真に独特かつ重要な作品であり、今後も不朽の名作として広く読まれていくことだろう。

(8)

本文中の引用

1. 久保木哲夫 著 「文法全解 古今集」 旺文社 1968 1 頁
2. KODANSHA ENCYCLOPEDIA OF JAPAN KODANSHA INTERNATIONAL 1983 31頁
3. 同2 32頁
4. 佐伯梅友 校注 「古今集和歌集」 岩波書店 1981 9 頁
5. 同1 1 頁
6. 同1 12頁
7. 松付明 編 「古語辞典」 旺文社 1988 1087頁
8. 同7 773 頁
9. 同7 1087頁
10. 同7 773 頁
11. 同1 15頁
12. 同1 15頁
13. 同7 1324頁
14. 同7 1326頁
15. 同7 1329頁
16. 同7 1328頁
17. 同7 1328頁
18. 同1 13頁
19. HELEN CRAIG McCULLOUGH TRANS. KOKINWAKASHU STANFORD UNIVERSITY PRESS 1985
1 頁
20. 同1 14頁
21. 同1 14頁
22. 同1 14頁
23. 同4 18頁
24. 同4 18頁
25. 小沢正夫 校注 「古今集和歌集」 (日本古典文学全集 第七卷) 小学館 1971
292 頁
26. 藤平春男 編 「古今集新古今集必携」 (別冊國文学9号) 學燈社 1981 53頁
27. 同4 19頁
28. 同4 18頁
29. 山田繁雄 編 「明解小倉百人一首」 三省堂 1987 44 頁
30. 同1 78頁
31. 同4 19頁
32. 同4 19頁

33. 同4 19頁
 34. 同26 53頁
 35. 同1 14頁
 36. 同1 13頁
 37. 同1 18頁
 38. 同4 21頁

参 考 文 献

- ・佐伯梅友 校注 「古今集和歌集」 岩波書店 1981
 ・小沢正夫 校注 「古今集和歌集」 (日本古典文学全集 第七卷) 1971
 ・久保木 哲夫 著 「文法全解 古今集」 旺文社 1968
 ・藤平春男 編 「古今集新古今集必携」 (別冊國文学9号) 學燈社 1981
 ・SENICHI HISAMATSU ED. BIOGRAPHICAL DICTIONARY OF JAPANESE LITERATURE
 KODANSHA INTERNATIONAL. 1976
 ・HELEN CRAIG McCULLOUGH TRANS. KOKINWAKASHUU STANFORD UNIVERSITY PRESS 1985
 ・松付明 編 「古語辞典」 旺文社 1988
 ・山田繁雄 編 「明解小倉百人一首」 三省堂 1987
 ・佐佐木信綱 編 「万葉集」 岩波書店 1927
 ・日本學術振興會 「英訳 万葉集」 岩波書店 1940
 ・DONALD KEENE ED. ANTHOLOGY OF JAPANESE LITERATURE GROVE PRESS
 ・桑原博史 監修 「明解 万葉集・古今集・新古今集」 三省堂 1990
 ・J. THOMAS RIMER A READER'S GUIDE TO JAPANESE LITERATURE
 KODANSHA INTERNATIONAL 1988
 ・KODANSHA ENCYCLOPAEDIA OF JAPAN KODANSHA INTERNATIONAL 1983